大江文学における共同体と犠牲

――『芽むしり仔撃ち』から『「芽むしり仔撃ち」裁判』へ――

岩田英作

一、はじめに

大江健三郎の『芽むしり仔撃ち』（「群像」一九五八年六月号）と『「芽むしり仔撃ち」裁判』（「新潮」一九八〇年二～四月号）とを読み比べた場合、両作品から受ける印象には、かなりの隔たりがあるのではないだろうか。

『芽むしり仔撃ち』について、読者の五感に直接響いてくるような感性の清新さ、的確さを賞賛する人は多い。しかし、それと同様なものを『「芽むしり仔撃ち」裁判』に求めてみても、それを窺うことはほとんど無理である。なぜなら、『「芽むしり仔撃ち」裁判』が刺激するのは、読者の感覚や身体ではなく、むしろ観念であり頭だからである。あるいは、宇宙との交感という、いわば超感覚だからである。

それから、もう一つの大きな違いは、〈村〉という共同体の扱われ方である。『芽むしり仔撃ち』の〈村〉は、感化院の少年たちとの鮮やか過ぎるほどの対比において、その否定性が強調されている。〈村〉を肯定しうる要素など皆無といってよいほど、その描き方は徹底しているのである。しかし、『「芽むしり仔撃ち」裁判』においては、『芽むしり仔撃ち』からは窺うことのできない、少年たちを残して〈村〉を去らざるをえなかった村人側の論理が展開されており、そこから見えてくる〈村〉は、もはや単純に悪と決めつけるわけにはいかないように思われる。

そこで、小論では、『芽むしり仔撃ち』の〈村〉と『「芽むしり仔撃ち」裁判』の〈村〉との距離を後者中心に考察し、[1] 一九八〇年当時の大江の共同体に対する認識を明らかにしてみたい。なお、一言に〈村〉といっても、その相はきわめて多様なものと考えられるが、『「芽むしり仔撃ち」裁判』の〈村〉に取り組む場合、特にその犠牲になった存在との関連が重要かと思われるので、小論では、その点を主眼に論じてみたい。

二、恐れの対象としての〈村〉

『「芽むしり仔撃ち」裁判』には、『芽むしり仔撃ち』のなかの〈僕〉が再び登場する。この〈僕〉は、自分のことを川に流されて死んだはずの弟と偽っており、〈作者〉の弟は、手紙のなかで、この弟と偽る〈僕〉のことを「反・弟」と呼んでいる。「反・弟」が弟だと

偽るようになったのは、敗戦の翌年の冬、すなわち『芽むしり仔撃ち』の内容からほぼ一年経過した時点で、「反・弟」が進駐軍と共に村人を告発するため再び〈村〉に入った時からである。「反・弟」は、兄として、失った弟のことを率直に証言すればよかったところを、なぜわざわざ弟に扮して、仲間が村人によって皆殺しにされたなどと偽証したのか。しかも、村人に対する「大きい恥」の感情を忍んでまで。その理由を、「反・弟」は、「恐かったからだ」と答えている。では、いったい何が恐かったのか。〈作者〉の弟は、それを説明するには〈村〉の創建時から今日までの歴史を語らねばならないといっているが、この作品内部からも、「反・弟」の〈村〉に対する恐れの内実をある程度抽出できるように思う。

「反・弟」は、再度訪れた〈村〉の印象として、第一に、「閉じられている狭さ」を、第二に、「老人たちの臭さ」を挙げている。特に後者について、「反・弟」は、老人たちの「臭いは、不潔さとは別の老年において避けがたい、死のように避けがたい臭い」であったとしている。また、他にも、動物たちの死体の発する悪臭が、谷間が子供らだけになると消滅したというような「反・弟」の発言も見られ、これらのことから、「反・弟」が老人に嗅ぎ取ったのは、死のイメージであると考えられる。そして、第三に挙げられるのは、村人の強固な団結力である。

≪谷間の本当の有力者らが、老若男女に、座り込め！と指令を発した瞬間、あらためて粉雪が降り始めたのだったが、それに加えて夕闇が迫っても、誰ひとり座りこみを解く気配はなかった。≫

この村人の姿勢に出合って、「反・弟」は、進駐軍の兵士らと「恐怖のみ」を「共有」していたのでもあるが、ともかく、以上のように、「反・弟」が〈村〉から受け取ったイメージとして、閉塞感・死・団結の三要素を見ることができる。

ところで、これらの要素は、『「芽むしり仔撃ち」裁判』だけでなく、『芽むしり仔撃ち』にも窺えるのではなかろうか。少年らを〈村〉に閉じ込めるために築かれたバリケード（閉塞感）、動物・感化院の一少年・李少年の父親・少女の母親などの死（死）、そして、一夜のうちに完璧に成し遂げられた村人の退去（団結）というように。だとすれば、「反・弟」は、〈村〉を再訪した際、かつての〈村〉での体験を思い起こしたために恐れを抱いたのであろうか。しかし、それだけでは、恐れの解釈はできても、「反・弟」が弟と偽った理由が判然としない。そこで、弟が川に落ちるに至った経緯を振り返ってみたい。

弟の愛犬レオが疫病に感染したとの疑いが生じ、南少年がレオを撲殺した時、「反・弟」が立たされた岐路は、恐慌に陥りそうな少年たち集団の維持に努めるか、それとも走り去って行く弟を追うべきかということであった。そして、「反・弟」は、前者を選んだのである。つまり、レオも弟も、要するに少年たちの生命の維持、ひいては集団の維持のための犠牲と受け取ることができる。この、少年たちとレオ・弟との関係は、〈村〉の存続を図るために退去した村人と残された少年たちとのそれに重なるのではないだろうか。もちろん、村人が少年たちのことを外部の人間でしかも感化院に属する者として最初から忌み嫌っていたのに対し、少年たちは弟やレオを先の事件が起こるまでは何ら問題なく受け入れていたわけであり、そういう感情の質の相違は確かにある。しかし、一個の集団がその存続を果たす背後で何らか

の犠牲が強いられたという事実、即ち、団結と死とが表裏となって分かちがたく結びついていたという事実は、〈村〉と少年たちの集団とに共通して認められるといわなくてはならない。そうであるならば、閉じられた〈村〉で、「反・弟」が老人に嗅いだ死や村人の示した団結は、「反・弟」にとって、かつての〈村〉や村人を想起させたばかりでなく、かつての仲間やその犠牲者たちをも髣髴させるものではなかっただろうか。つまり、〈村〉や村人は、単に外の景としてあるのではなく、「反・弟」みずから加わっていた集団をも映し出す、いわば「反・弟」に内在化された景でもあったはずである。この、〈村〉と「反・弟」の属した集団との等質性を考慮に入れれば、「反・弟」の〈村〉に対する恐れは、同時に「反・弟」自身の内なる〈村〉への恐れでもあったと考えられるのである。

さて、なぜ「反・弟」は弟に化けたのか。なぜ「反・弟」は「反・弟」自身として生きなかったのか。その理由も、いまは理解できるように思う。すなわち、「反・弟」は、集団維持のために弟を見捨てた自己を恐れ、そういう自己を隠してしまうために、見捨てられた弟に成り代わったのだと考えられるのである。

三、ヴィエトナムという名の〈村〉

「反・弟」の特徴の一つに、その傷ついた肉体が挙げられる。「反・弟」は、ヴィエトナム戦争にアメリカ軍の一兵士として参加し、「ヴィエトコン」を五二人も殺した代償として、片腕、片脚、両眼、顎の下半分と声帯を失ったのであるが、「反・弟」は、そういう著しい障害を負ったにもかかわらず、以後も、アメリカ大統領に向けて、「ヴィエトコン」を殲滅するために眼と自動小銃を与えてくれと嘆願書を出し、あるいは義眼をつけた自分を「ヴィエトコン」威嚇用の案山子としてヴィエトナムへ送り出すつもりはないかどうかを打診したりしている。「反・弟」がヴィエトナム戦争に参加したもともとの理由は、アメリカの市民権を得るためだったのであるが、それだけの理由ならば、もっと穏当な方法がありそうなものである。「反・弟」が己のからだを傷つけてまでヴィエトナムにこだわる事情は、アメリカの市民権の問題だけで理解するのは到底困難であるように思われる。

そこで、例えば、「反・弟」の次のような発言に注目したい。デモクラシー裁判で、村人と進駐軍が対峙し一触即発の危機に瀕した時のことに触れて、「反・弟」は、「軍隊が攻撃を始めたなら、すぐにも谷間の人間は殲滅され施設は破壊しつくされただろう。ヴィエトナムでの経験にそくしていえることだが、幾分は谷間の地形までが……」と、ここでは〈村〉の地形に関してヴィエトナムを念頭に語っている。さらに、「反・弟」は、〈村〉で行われたその裁判において偽証が暴かれ絶望した自分のことを、「ヴィエトナムの森の狐のように仮死状態にあった」と言い表している。つまり、これらの箇所でヴィエトナムと〈村〉は、「反・弟」の内部で交錯していると考えられるが、そのように、〈村〉とヴィエトナムとが、おそらく閉じられた空間として「反・弟」に二重写しになって見えていたならば、それらの場に生きる村人と「ヴィエトコン」も、「反・弟」には重なって見えたのではないかと想像されるのである。これは確かに一種の狂気である。しかし、そうした狂気に駆り立てる力を空間に読み取ることは、ことにその空間が閉所である場合には可能であるように思うのである。「反・

弟」の「ヴィエトコン」への異様なまでの執着と殺意について、そのような仮説に立って考えてみれば、それはつまり、自己を恐怖させる村人への執着と殺意なのであり、言い換えれば、自己の内に住んでいる村人を見せつける鏡を割ることであったといいうる。いや、鏡ばかりでなく、「反・弟」はその肉体をも極度に損傷しているのであり、その上なおも威嚇用の案山子になろうとすることには、むしろ自分自身が破壊されることへの願望さえ窺えよう。そして、おそらくこの自己破壊の衝動には、「反・弟」がかつて弟を犠牲にしてしまわざるをえなかったことに対する罪障の念が働いていたのではないだろうか。

しかしながら、村人としての「ヴィエトコン」を殺すにせよ、逆に自己を滅ぼすにせよ、「反・弟」の恐れに向かう姿勢は、いずれも消極的なものであるといわなくてはならないだろう。まず、前者についていえば、鏡を何枚割ってみたところでそれはあくまで鏡にしか過ぎず、鏡の前に立つ「反・弟」に変化が訪れようはずがない。後者についていえば、自己破壊の果てに、仮に「反・弟」が死を迎えようとも、そこで恐れは忘却されるのであって、克服されるのではない。〈作者〉の弟が「反・弟」と初めて会った際、「反・弟」は、その車椅子に、自分の殺した「ヴィエトコン」を思わせるドクロマークをつけ、およそ恐れなどとは無縁であるかのように傲然と控えていたのであるが、そうしたデモンストレーションは、それが大袈裟であればあるほど、かえって「反・弟」の恐れがいまだ克服されていないことを明かし出している。言い換えれば、それほど大仰に振る舞わねばバランスがとれなくなるほど、「反・弟」の〈村〉に対する恐れは大きく、深いのである。

四、恐れを乗り超える道＝宇宙論と、その相対化

「反・弟」は、その肉体的特徴のほかにもう一つ、非常に宇宙に関心を持つ人物として特徴づけられている。宇宙とはどういうものなのか、なぜ宇宙がこのようにあるか、それを把握することに、「反・弟」は、障害を負った体で自分がなおも生き続ける理由を見出している。そして、例えば「反・弟」は、〈作者〉の弟に次のようなことをいっている。

≪きみにあの裁判の日に起ったことの記憶を押しひろげるようにしてもらい、あの日が重要な象徴をなす日のひとつの、自分の幼・少年時を宇宙に向けて開くように把握しなおしたいのだから。≫

押し広げられ、開かれ、把握しなおされねばならない、「反・弟」の幼少年時の、そして裁判の日の記憶の、それらの中核にあるのは、いうまでもなく、閉じられた〈村〉でこそあるだろう。「反・弟」のいう宇宙把握とは、そのように〈村〉と密接な繋がりのあるものであり、「反・弟」が恐怖を抱いていた〈村〉のイメージを〈閉〉から〈開〉へと変換し、自己を恐怖から解放する試みであると考えられる。では、「反・弟」が〈村〉から受け取った残り二つのイメージ、すなわち集団の団結および死と、宇宙把握との関係はどうであろうか。

〈村〉をめぐる「反・弟」と〈作者〉の弟との会話が佳境に入った場面で、〈作者〉の弟は、村人が少年たちを置き去りにして〈村〉を去った行為を、「村と人間と土地の、根本的な原理」に基づくものだとし、「反・弟」は、その〈村〉の原理なるものを「宇宙論的な原理」と言い換え、次のように村人の退去を意味づけている。

《ともかくもあの村の人びとの、その共同体的な心の動きは、なみたいていのものじゃなかったはずだよ。誰も個として感じたり考えたりはしなかったのじゃないか？　きみらが村を出て流浪して試練をへた後、あらためて村に帰還した際、長老らがいかに激越に腹を立てたか。その理由もわかって来るように思うんだ。それはきみら村の人間が逃亡している間、置きざりにされた村が総体において死に、暗黒の深みに沈んで、そこを胎内のようにくぐりぬけることによって、再生を準備していなければならなかった。むしろ村に死の時間をあたえるために逃亡したのであったのに、人びとが帰還してみると、そこでは私たちがにぎやかに暮していたんだ。雪が降って森の奥には食うものがなくなって里に降りて野鳥をとらえた日には、祭までもおこなって。私はあの祭をいつも思い出してきた……》

「反・弟」によるこの発言には、事実の歪曲が一つある。「反・弟」は、ここで、死と再生とをキー・ワードに、村人の退去に意義を見出し、逆に置き去りにされた「反・弟」ら少年たちの行為には反省的ですらある。すなわち、村人の退去とは、〈村〉の一時的な死であり、〈村〉が再生するために必要な階梯であったのに、残された「反・弟」らはむしろ生を演じてしまっていたのだと。けれども、実際には、少年たちは決して生を謳歌してばかりいたのではない。なぜなら、そこには見捨てられた弟の存在があったのであり、その存在は、むしろ生とは逆の方向に走り去っていったからである。「反・弟」がその事実を隠さねばならないのは、いうまでもなく、「反・弟」が弟を演じているからにほかならない。また、この場面で「反・弟」が懐かしむ雪の日の祭は、弟が雉を捕まえたことに始まり、その雉を中心に仲間の捕まえた鳥たちが並べられたのであるが、その配置がよく象徴しているように、少年たちの生の祝祭の中心は弟であったといえよう。「反・弟」が「あの祭をいつも思い出」す時、それは同時に、生き生きと輝いていた頃の弟を思い出すことでもあったはずである。

このように、右の「反・弟」の発言の背後には、言い出すことのできない弟の生と死とが色濃く脈打っているのであり、そのような「反・弟」の情動を読み取るならば、「反・弟」が死を再生の契機と見なすことも理解できるように思われる。すなわち、「反・弟」は、弟の死が〈村〉の再生を導くという、いわば輪廻を想定することにより、弟を物理的な死から解き放ち、生き残った者の内において蘇らせたかったのだと考えられる。そして、このような死の意味づけは、当然「反・弟」の集団の団結に対する理解とも深く関わっている。右の引用部分で、「反・弟」は、村人が「誰も個として感じたり考えたりはしなかったのじゃないか」といっているが、村人のこうした強い共同体意識の原理に、「反・弟」は、死と再生のサイクルを見出しているわけで、「反・弟」にとって、死の意義づけは、同時に集団の団結力に意義を見出すことでもあったと考えられるのである。

以上のことから、「反・弟」の宇宙把握は、「反・弟」が〈村〉から受け取ったイメージを反転させる企みであったといえる。つまり、「反・弟」は、〈作者〉の弟との対話を通して、デモクラシー裁判の時もヴィエトナムの時も、常に恐れの対象であった〈村〉に肯定的な意味を付与することによって、そこに恐れを乗り超える道を見出していったと考えられる。かつ、その道は、犠牲となった弟の鎮魂のための道であるし、〈村〉的側面を内在する「反・弟」自身の救済のため

の道でもあっただろう。

ところで、ここで手紙の書き手である〈作者〉の弟と〈村〉との関係にも眼を向けておきたい。〈作者〉の弟は、はじめは、〈村〉からの逃亡の際に「恥と憤りにうなだれて」いたと語っていたのであるが、「反・弟」との対話を経ていくうちに、「どうしてそのように根本的な動機からの逃散を、われわれが恥じなければならないか？」と、恥を打ち消すようになっており、さらに弟については、「『弟』はわれわれが立ち去るほかになかった村の土地を、そこに来て守ってくれ、そしてわれわれの留守中のすべての災厄を引きうけて、川に流れて死んだ」犠牲と受け止め、「たとえハワイの強制収容所に送られるかたちであれ、そのようにして犠牲をささげることにためらいはなかったはずだ」と、村人の行為を肯定するに至っている。この一連の、〈作者〉の弟の〈村〉と弟に対する認識の移行は、さきに見た「反・弟」のそれとほとんど軌を一にしている。また、それに加えて、次の点も見ておきたい。これは、〈作者〉の弟が、「反・弟」との〈村〉に関わる対話を経て後、海水浴をした場面でのことであるが、まずそこでは、「根からたち切られた水草の漂う、汚ない水のなかを泳いだこと。それは兄さん、われわれの谷間の川の濁り水の禁忌をおかす思いにしたのだけれども、実際に罰が皮膚の奥から噴き出すようにあらわれた」と、〈村〉の禁忌に対する謀叛と罰が示されている。そして続いて、「しかし僕は、兄さん、いまさっき根本から切れた水草の浮かぶ汚ない水のなかを泳ぎつつ、戦争末期の村の人間らの行為全体に大きい嫌悪を味わっていた時こそ、自分にとっての真の危機だったとさとっていたのだ」と、自己が〈村〉に対して犯した過ちの自覚が語られ、最後には、「しかし、僕は、あの長いままちぎれた水草が腕と足にからむ濁り水からなんとか生還したのであるから、いま発疹に苦しんでいる状態も、自分が最悪の危険をまぬがれて浮上する、その一過程だと知っているのでもあった」という。つまり、〈作者〉の弟は、「根本から切れた水草」の浮かぶ禁忌の濁り水から浮上して、〈村〉を自己を支える「根本」として見直すことによって、これもまた「反・弟」と同様に、自己の救済を行おうとしたのだと考えられるのである。

さて、以上のことから考えてみて、〈作者〉の弟が〈作者〉に宛てた手紙の主張は、『芽むしり仔撃ち』においては酷薄な存在でしかなかった〈村〉を復権することにあったといえるだろう。その意味で、『「芽むしり仔撃ち」裁判』は『芽むしり仔撃ち』の反措定であると一応考えられる。また、「反・弟」の辿った軌跡を簡単に整理してみれば、それは、恐れの対象としての〈村〉を告発する一方で、自己の内なる〈村〉へは眼を閉ざしていた段階から、ヴィエトナム体験を経て、やがて〈作者〉の弟との対話から、恐れを正面から受け止め、乗り超えようとしていくものであった。そして、このような「反・弟」の軌跡は、〈村〉の人間でありながら、〈村〉の外部の人間として〈村〉を告発しにかかった〈作者〉の欺瞞を、真向から糾弾するものといえるだろう。

では、この作品は、『芽むしり仔撃ち』を一八〇度転倒させた、つまりは〈村〉を救い、〈作者〉を有罪と裁定した物語であったのか。しかし、この問いに答えるには、作品の冒頭にわずかに記された、被告人たる〈作者〉の側の言葉も、あわせて検証しておく必要があるだろう。

まず、〈作者〉はそこで、「この報告の根底に横たわる事件について、かつて小説を書いたことのある僕は、弟の手紙を自分の解釈・批判はぬきにして以下に書きうつす」とことわっている。わざわざそのような断り書きを付すということは、弟の手紙に対し、「解釈・批判」の余地があるということだと受け止められはしないだろうか。また、そのことと合わせて、次の箇所にも留意したい。

《僕は弟がなぜ英語で書くのかということについても意見を持つが、ここではその表現するところが事実であることを、すくなくともなかば信じるといっておきたい。なかば信じる、とあいまいなことをいうのは、僕の『芽むしり仔撃ち』という小説がひきおこした、われわれの地方での非難の、そのなお消えさってはいないコダマを、弟自身聞きつづけていたのだからだ。かれはあらたにその事件について僕が書くことを考え、「言葉」として直接の連帯責任をとらぬよう、英語で報告してきたのでもあろう。》

ここで話題にされているのは、弟の採用した英語による表現とその内容に関してである。まず、内容のほうから見れば、〈作者〉は、弟の手紙の内容を全面的には信頼できない理由として、弟が〈村〉から〈作者〉に向けられた非難を知っていた点を挙げている。つまり、〈作者〉の疑いは、弟による〈村〉の肯定性の強調が、弟の本心から行われたものというよりも、〈村〉を批判するような小説を書いた兄の巻き添えを被らないための企みではないのか、ということにあると思われる。また、英語という表現方法に対しても、内容に対する疑念と同様で、〈作者〉は、そこに弟の連帯責任の回避を読み取っている。

作品冒頭に記された〈作者〉の言葉は、感情を抑制した文体ではあるけれども、しかし確実に弟の手紙と距離を置いて書かれている。「反・弟」と〈作者〉の弟の〈村〉への開眼が、両者を救済するほどの強い力をもちうるものであったかどうか。いや、そもそも〈村〉の論理など、彼らは本気で信じていたのかどうか。それを立証する手立ては見つからないが、しかし、そうした疑念を抱かせる余地を、作者はあえて作品の冒頭に書き込んでいるのである。それはなぜか。

五、『「芽むしり仔撃ち」裁判』の位置

『「芽むしり仔撃ち」裁判』発表の前年、大江の大作『同時代ゲーム』が刊行されている。篠原茂氏の報告によれば、[2]『「芽むしり仔撃ち」裁判』は、『同時代のゲーム』の第一稿が第二稿に書き改められる過程で削除された部分を独立させたものである。周知のとおり、『同時代ゲーム』には、〈村〉の創建時以来の様ざまな伝承者が描かれているが、氏の報告に基づけば、はじめは、川に流されて死んだ弟も、その伝承者たちの仲間入りをするはずだったことになる。なぜ、弟は『同時代ゲーム』における伝承者たちから除外されたのであろうか。

そこで、『同時代ゲーム』に登場する〈村〉の伝承者のうち、〈村〉の存続を目的として、死というかたちであれ幽閉というかたちであれ、何らかの犠牲を被った人物を拾ってみると、その大多数には、犠牲となる必然性を見出すことができる。詳細は注に譲るが、[3]例えば、「壊す人」は、〈村〉の圧制者としてふるまったために村人によって殺害されたのであるし、亀井銘助は、〈村〉の一揆を指導したため藩によって投獄されたのである。両者に、彼らを罰したのが〈村〉の人間と

〈村〉の外部の人間という相違は認められるものの、いずれにしても、罰する側からすれば、共に罪の徴を見出すことができるのであり、それらは、〈村〉の犠牲となる必然性がある者としてひと括りにして考えることができる。それに対して、必然性の見出しえない人物は、私の見たところでは、わずか二例にとどまる。すなわち、村人が中に入って演じる牛鬼に踏み殺されたり襲われたりした児童五名と娘、村人が大日本帝国軍に抵抗するために人工的に起こした洪水が原因で奇形障害などにみまわれた下流域の人びとがそれに該当する。人数にすればかなりの数に上ろうが、児童・娘・下流域の人びとは、いずれも目鼻立ちのはっきりしない、いわば匿名的存在である。ここで弟がどちらに該当するかを考えてみた場合、必然性の見出しえない人物に数えられることは明らかだろう。だとすれば、もしも弟が『同時代ゲーム』に加えられていたならば、弟は、罪もないのに犠牲となった人物たちの象徴的存在たりえたであろう。おそらく、大江のためらいはその点にこそあったと思われる。『同時代ゲーム』の終わりには、森に入った〈僕〉が、「次つぎにあらわれて来る硝子玉のように明るい空間に、ありとあるわれわれの土地の伝承の人物たちを見た」ことが語られている。前田愛氏の指摘するとおり[4]、この場面は、〈僕〉にとって、まさに至福の瞬間だったに違いないが、かりにその伝承者の中に弟の姿も見受けられたとしたならば、その至福に影が射すことになったのではなかったか。

つまり、『同時代ゲーム』から弟が外されたことも、『「芽むしり仔撃ち」裁判』において〈村〉の論理が決して絶対化されていないことも、無辜の者すらも犠牲にして生き延びていく、凄まじいまでの共同体の在り方に対し、大江が危惧を抱いていたことのあらわれと受け取ってよいだろう。

『芽むしり仔撃ち』から『「芽むしり仔撃ち」裁判』へ、〈村〉という共同体は宇宙論を軸に大きく転換しながら、しかしなお、大江は、『「芽むしり仔撃ち」裁判』における共同体の在り方に全面的な支持を行ってはいない。『芽むしり仔撃ち』において、村人を最後まで肯じることのなかった〈僕〉は、二二年を経てなお、大江の中に生きていたのである。『「芽むしり仔撃ち」裁判』は、たしかに『同時代ゲーム』をめぐる小さな衛星のような存在かも知れない。しかし、その衛星は、大江の共同体に対する認識の微妙な揺らぎをよりよく示している作品として、独自な光彩を放っているのである。

また、いま述べたことを裏返してみると、大江がこのように、共同体の在り方に疑義を呈しながら、それでもなお共同体にこだわりつづけるのはなぜかということになる。世界モデルの創造を小説家の役割とみなすこと、そうした理念に大江を根源で駆り立てているものは何なのか。大江の原体験が四国の奥深い山中の村で培われたことに大きな要因があるにしても、いかに培われたかを掘り下げてみないことには意を尽くせない。残念ながら、その作業は今後に委ねなければならないが、ただ、いま考えられることは、個の探究が近代文学の王道であったとすれば、大江の共同体の追求は、それとはやや次元を異にしているということである。むしろ大江の思考は前近代的といってもいいかもしれない。唐突かも知れないが、このように大江について考えをめぐらしていると、宮沢賢治のことが思い出されてくる。まだまだ粗削りの比較でしかないが、循環する生の体系としての宇宙、そのな

かの森羅万象のひとつとしての人間、賢治のそういう壮大なスケールの人間把握に、大江の宇宙論は隣接する要素をもっているように思われるのである。ただし、賢治と大江では、その時代的背景にはかなりの相違があるだろう。賢治の生きた時代は、巨視的に見た場合、個性を謳歌することのできた、いわば個の安定期だといってよいだろうが、しかし、大江の生きる今日は、いくら仮面を剝がしてもけっして素顔にたどりつくことはできないような、著しく個の解体した時代である。そして、賢治の時代はともかくも、今日のような主体喪失の時代においては、個単位で人間を把握するよりも、むしろ両者のように、宇宙という共同体に属するものとして人間を捉え、その在り方を問うほうが、かえって個の救済の可能性も開けてくるのではないだろうか。少なくとも、主体の喪失を嘆いたり、半分開き直って虚無的な戯れを演じてみせるだけの作品よりは、賢治や大江の作品のほうが、私には貴重に思われるのである。

話がやや逸れてしまったが、今回小論で取り挙げた、共同体の存続と犠牲の問題は、『「芽むしり仔撃ち」裁判』以後、大江文学のなかでどのような展開を見せているのだろうか。その細かな検討は今後に譲りたいが、現在の見通しでは、この問題が、以後、合論理的に解決されていくとは考えにくいのである。解決されるとすれば、おそらくそこには、〈祈り〉というひとつの飛躍が見られるのではないかと、やはりここでも、いくらか賢治のことを思い浮かべながら、今の私は考えている。

〔注〕

(1) 『芽むしり仔撃ち』については、かつて拙稿「『芽むしり仔撃ち』論――「僕」像の修正をめざして――」（「近代文学試論」第二七号、一九八九）において論じたことがあるので参照していたければ幸いである。

(2) 篠原茂著『大江健三郎文学事典』（スタジオVIC、一九八四）

(3) 必然性を見出しうる犠牲者を以下に列挙する。なお、（ ）内は、その必然性を簡略に示したものである。

- 壊す人（圧制者としてふるまう→村人により殺害）
- シリメ（壊す人の殺害に加担→不注意から死亡）
- オシコメ（復古運動のため民家を焼き払う→村人により幽閉）
- 亀井銘助（一揆を指導→藩側により投獄）
- 木から降りん人（村を軍隊から守る→軍隊により殺害）
- 犬曳き屋（村を軍隊から守る→軍隊により殺害）
- アポ爺・ペリ爺（父＝神主の身代わりになろうとする→特高警察により逮捕）
- 脱藩者（子供を人質に村にとどまる→村人により殺害）
- 大日本帝国軍（村を制圧しようとする→村人により殺害・負傷）

(4) 前田愛「宇宙論と救済」（「國文學・解釈と教材の研究」一九八三・六）